

令和4年度 発信型英語教育拠点校事業 ～宮城県白石高等学校～

課題・テーマ

本校生徒の課題と考えられる話すことについて、「即興性を重視したやりとりの活動の充実」をテーマとした。今年度4月実施の2年次生徒へのアンケートでは、「話すこと」を苦手と考えている生徒が最も多く、昨年度から改善されておらず、「話すこと」に対する生徒のモチベーションを高める一貫した学習活動が行われていないことが一因と考え、これをテーマとした。

具体的な取組と工夫

- やりとりを継続させる語彙や表現、態度について学び、毎回の授業の中で短い発話でもより継続的に行えるようにするため、帯活動としてスモールトークの活動を継続して実施し、授業で扱う題材について英語で話すための導入を丁寧に行なった。
- あるテーマや題材について、生徒が話す準備として、お互いの考えを共有してまとめる活動を充実させ、生徒が話したい内容を整理させる過程を重視した。
- 生徒が話したいと思う題材や切り口を準備し、それについてのやりとりの中で生徒が言えること・言えないことを自覚させることで、学習や話すことの意欲の向上を図った。また、生徒が題材をより身近に捉えて考え、英語で表現できるように題材を工夫した。
- これまで校内で他学年・他学科の取り組みについてお互いに話し合ったり、授業の計画について共有したりする機会が非常に少なかったため、相互に授業の見学を行いながら、本研究の目的の達成に向けて一貫した指導を行えるように目線合わせを行った。
- 生徒の積極的な発話を引き出す英語の授業を開発に力を入れている関東圏の学校を訪問した。教科を横断した授業展開で生徒が話したいと感じる題材を取り入れる工夫や、生徒の考えを即時的に共有し、思考を深める取り組みを視察した。
- 東北学院大学副学長文学部教育学科教授・村野井仁氏による講演を開催した。授業内での1つ1つの活動を細かく条件付けすることで生徒からより活発な発話を引き出す工夫についてお話をいただいた。

授業公開の題材『白石から電柱・電線を無くすべきか否か』より



成果

- 継続的なやりとりの積み重ねで、生徒が発話について少しずつ自信を持つようになった。アンケートの結果では、英語の学習を前向きに捉える生徒の数が2割増加した。また、話すことについて苦手意識がある生徒の数も1割減少した。
- 話題について考え、それを英語で表現するという活動の流れに生徒自身が慣れ、より抵抗感が少ない状態で活動に取り組んだり、学習する英語の題材への導入がスムーズにできるようになった。
- 話す活動の中でどこにつまづきを感じているのかを精査し、的確に助言をできるようにになった。
- 課題に取り組ませる際の生徒の反応を事前に想定し、手立てを講じることができるようになった。

課題及び改善案

- 話すことの活動の中で、積極的に話そうとする態度は改善されてきたが、言いたいのに言えないことが出てきた時に粘り強く考えたり、うまく言い換えたりすることはできていない生徒が多い。明確な評価規準を示したパフォーマンステストの設定と、それに向けた長期的な指導が必要である。
- 校内での情報共有はまだ不足している状態で、3年間を見通す一貫した指導計画の作成には至っていない。今後さらに科内で話を進めていかねばならない。